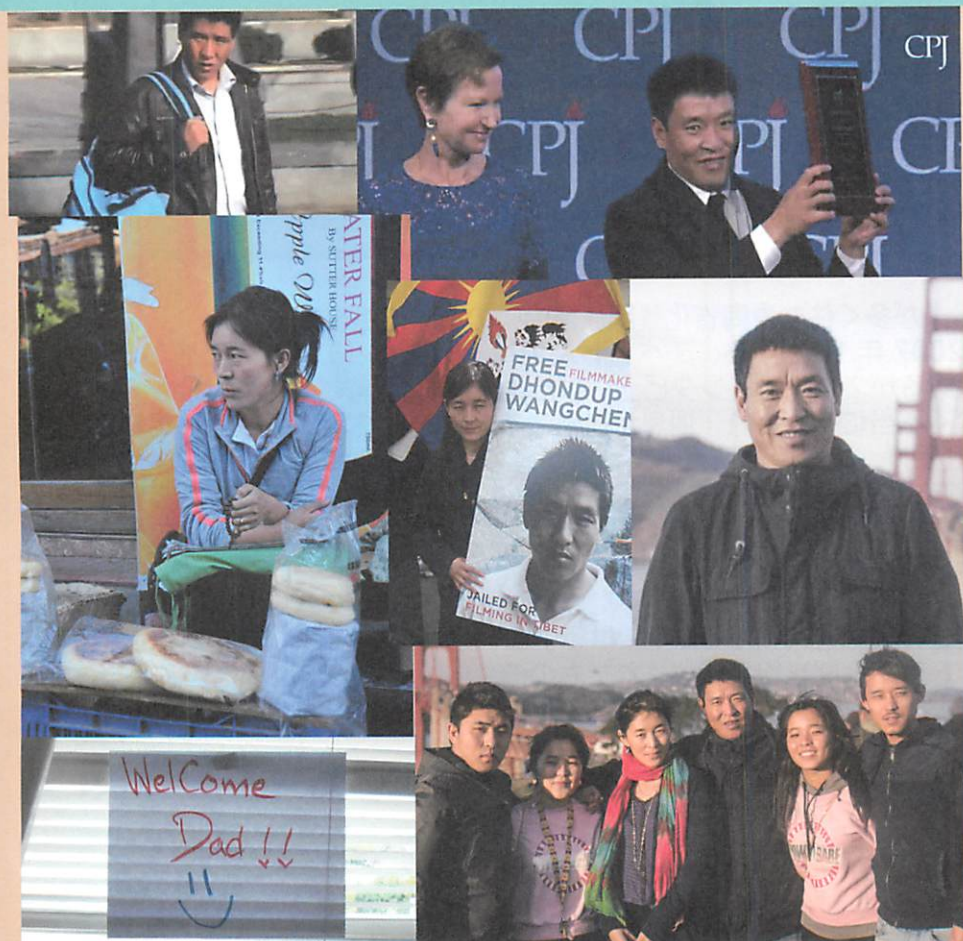


初来日 中国のチベット圧政を暴き、獄中6年

ドゥンドゥップ・ワンチェン

～空白の10年と今を語る～



「命より大切なものは、自由」。
突然の拘束、不当な判決による6年の投獄と3年の軟禁。
彼は、中国支配下のチベットから脱出した。
家族との再会、そして自由のために――。

2008年北京オリンピック開催についてチベット人の真意を映すドキュメンタリー映画を撮り、中国で囚われの身になったドゥンドゥップ・ワンチェン。2017年、秘密のルートを経て奇跡的に米国へ亡命を成功させた彼が初来日し、自らの体験とチベットの現状、元政治犯の窮状を語る。突然の逮捕から、家族と再会を果たすまでの10年間、彼の身に何が起こったのか。その真実と思いに迫る。

会場：3月22日(日)

開演：14:00～(13:30開場)

場所：東京大学駒場キャンパス KOMCEE K212

主催：キキソチベットまつり実行委員会

協力：ダライ・ラマ法王日本代表部事務所

STUDENTS FOR A FREE TIBET JAPAN

東京大学現代中国研究拠点 中国語 TLP プログラム

アムネスティ・インターナショナル日本 中国チーム



Dhondup Wangchen

ドゥンドゥップ・ワンチェン

■プロフィール■

1974年、チベット人が多く住む青海省化隆回族自治県の農家に生まれる。北京五輪を控えた2007年10月から、チベット人100人以上に「五輪をどう思うか?」「チベットに自由はあるか?」などインタビューしたビデオを撮影。

08年3月、理由なく不当に拘束され、消息が途絶える。09年12月「国家分裂扇動罪」で懲役6年の判決を受け、労働改造所へ(※1)。彼が撮影した映像は、映画『恐怖を乗り越えて』(※2)としてまとめられ北京にて秘密裏に上映された。映像には五輪に対する声だけでなく、強制移住や中国政府による資源収奪の実態、教育・文化面での抑圧などを訴えるチベット人たちの声が収録されていた。

アムネスティ・インターナショナルやヒューマン・ライツ・ウォッチなど世界中の人権団体によって彼の釈放運動が広がり、12年には獄中にいながらにして「国際報道自由賞」が贈られた。14年6月、刑期を終え釈放されたものの、中国当局の監視が続き自宅軟禁状態となる。17年12月、亡命に成功し、米国で難民として生活する家族と10年ぶりに再会。現在は、米国で難民生活を送る。

チベットの現状や元政治犯の窮状を訴えるため、米国やヨーロッパで講演を続けている。

※1 労働改造所=過酷な強制労働を通じて思想教育を行うための施設

※2 日本語版ダイジェスト

<http://www.sftjapan.org/nihongo:leavingfearbehind>

【講演会スケジュール】

3月20日(金) 福岡市 市民福祉プラザ

3月21日(土) NPO センター鎌倉

3月22日(日) 東京大学駒場キャンパス

3月27日(金) space&cafe ポレポレ坐(東京)

3月28日(土) 元町映画館(神戸)

3月29日(日) 銭屋ホール(大阪)

※変更の可能性があります。

詳細は、こちらまで

お問い合わせ: dw2020mar@gmail.com



■関連書籍■

『パンと牢獄——チベット政治犯ドゥンドゥップと妻の亡命ノート』
小川真利枝著 (2020年3月5日 集英社クリエイティブより刊行)

2009年にインドのダラムサラでドゥンドゥップの妻ラモ・ツォと出会った日本人の映画監督・小川真利枝が、8年の歳月をかけて制作したドキュメンタリー映画『ラモツォの亡命ノート』(2017年劇場公開)。その後もさらにラモ・ツォを追いつけた著者は、一家の再会と再生を目撃し、今まで誰にも語られなかったドゥンドゥップの獄中生活と亡命に関する独白を取材。ドゥンドゥップとラモ・ツォ家族の生き様をとおして、数字でしか語られない移民・難民問題について、よりダイナミックで生命力溢れる個の物語を描く。本体価:1,500円+税



「故郷」は消えない。空想の中でも尊厳を持ち生き抜く人々がいる限り、安田菜津紀さん(2019年)著